

「日本語教育の参照枠」における漢字・文字の扱いについて

公益社団法人国際日本語普及協会

これまでの社会人、年少者、難民等多様な学習者を対象に教育実践、教材開発をしてきた立場から文字教育の重要性を述べたい。

日本語の大きな特徴である、文字表記の学習は、外国人学習者、特に非漢字系学習者にとって学習の負担を伴うものである。しかし、中・長期に在留する人が増加する中、社会の一員として、就労、留学、社会生活を送る上において不可欠である。従って、基礎力をつけるために共通に必要な漢字を選び、効果的な教育を提供することが重要であると考え。そのことにより学習上の負担が軽減されると考える。

一方、2021年2月に「『日本語教育の参照枠』に関する調査協力者会議』の資料としてまとめた基礎漢字策定のための基礎調査で示したように地域の日本語教室における文字教育の支援は、すべて個人が必要とする漢字ならびに語彙学習を支援する、個別のニーズに応えるものである。これは、地域だけではなく今上記多様な学習者においても同様であり、必要な漢字は個々に違う。また、地域差も大きい。

以上のことから、殊に漢字・漢字語彙に関しては、汎用性と分野別・地域性を活かした個別性をポイントとして考える。

(AJALTは基礎漢字300字、経済・政治・法律の分野別漢字各200字を設定)

1. 日本語教育の参照枠に文字を含む意義について

○ 文字学習の機会が得られないことによる弊害

- ・今まで以上に、就労、子育て、教育に直接関わるようになる。このことから、日本語の大きな特徴である文字の学習ができないことは、社会に深く関わることができず、社会の分断を招く可能性もあると考える。
- ・就労先や公共の場で危険を回避できず、安全に暮らすことができない。
⇒ 例) 頭上注意 危険、禁止、とまれ、押す、引く、開ける、閉める(サインとしての漢字語彙)
- ・文字による情報収集ができない。情報弱者となる。
- ・文字が十分に読めない場合は、不利益な立場になりやすい。
- ・就労先、仕事の内容が限定される。ステップアップできない。
- ・子どもを持つ親、特に母親は、予定や持ち物などが記された学校からのお便り、お知らせが読めない。
(地域の日本語教室では、お便りを読めるようになるための支援活動も行われている。)

- ・子どもたちの日本語教育も極めて重要であるが、子どもたちの親が文字を知らないことで、子どもの教育への親の関心も薄れる。コミュニケーションの断絶が起こる。

(親子が一緒に学ぶことにより、子どもたちの日本語学習への意欲が高まる等精神的な面への効果が高い。親子が協力してお便りを読んだり、音読の宿題ができれば良い。)

○従来の文字指導・文字学習の問題点

文字の学習は、日本に在住しているからといって、自然に習得できるものではない。

意識的に学ぶ物である。学習者自身が覚えなければならないものである。これは間違いない。ひらがなやカタカナは数が限られているので、短期間に達成感も得られる。しかし、漢字の学習、指導は数が多いため時間がかかる。そこで、専門家の指導が望まれる。最終的に継続的に学習者が自律学習できるよう道筋を作ることが大きな役割であると考えられる。

ここでは、日本語教育の専門家による漢字指導の重要性を述べる。

- ・何のために漢字を学習するのかをしっかりと伝える姿勢が必要である。
漢字力を就労に活かすのか、生活に活かすのか目的をはっきりさせることが必要である。動機付けが大切である。
- ・単漢字をいくつ覚えているかではなく、漢字語、漢字語彙の運用力が大切であることを伝える。
- ・学習者に対して、漢字学習の目標やスケジュールを伝える。
- ・漢字の苦手意識を作っているのは、入門期における文字指導に問題があるからにほかならないと考える。入門期にいかに関心を持たせるか、学習したことによってそれが、生活の中でどう生きてくるのか、日本語の世界が広がること、面白さを伝えることが肝心である。
- ・入門期におもしろいと感じ、意欲を持って学習して、それで良いのかというところではない。そこから、漢字が持つ特性、形音義について体得するまで、しっかりサポートしなければ、その先、自律学習ができず、途中で挫折することも十分考えられる。教師の指導のもと、土台を作ることが重要である。
- ・漢字の指導は、漢字系学習者、非漢字系学習者とは、アプローチや指導内容が異なる。漢字系学習者は、漢字そのものの特性、漢字にはそれぞれ、かたち(形)、おと(音)、意味(義)の3要素があるということを知っている。しかし、非漢字系学習者はこの点を一から学ぶことになり、学習法がわからないことが多い。両者にはこの差が大きい。

- ・また、小学校で学ぶ漢字を導入し、小学生向けの教材を使って練習をするという指導も見られるが、小学校で学ぶ漢字は、教科とのつながりもあり、成人が、学ばなければならない必須のものではない。
- ・日本人は、小学校から漢字に親しみ、中学修了までに常用漢字表にある漢字を理解できるよう指導要領に示されている。一方、外国人学習者は、時間的制約があるため、それぞれに必要な漢字を効果的に指導する必要がある。
- ・どの漢字も書かなければならないということはなく、意味が理解できるもの、実際に書く機会が多く、書くことも学ぶものを分けることも大切である。すべて書くことを求めることは、学習者の大きな負担となる。

○日本語・日本文化に親しみ、理解を深めることにつながる

- ・漢字を学ぶことで、漢字語彙が増え、日本語の幅が広がり、日本語が豊かになる。
- ・漢字が持つ特性を活かし、教えることによって、生の情報やさまざまな分野について直接日本語で書かれたものを読むことにより日本語や日本文化への理解がまる。

2. 「日本語教育の参照枠」における漢字の扱いについて

成人が習得すべき漢字は、教育漢字とは異なる。

生活・留学・就労分野で習得すべき漢字数は異なることから、一定のA2の漢字の数を定めることは困難である。

基礎漢字のみを設定することが適当である。

個別の漢字。分野別漢字を別途設定することが肝要であること。

漢字は言語活動別ではなく、正書法や読字能力などを参考に言語能力のひとつとして捉え、レベル別の大まかな枠組みを示すこと

基礎漢字を踏まえつつ、Aレベル別の大まかな枠組みを示すこと

3. 基礎漢字の策定方法について

○策定の方針について

- ①分野を問わず、国内外全ての学習者に共通の漢字とする
- ②読みの正確さや書きまでは求めず、意味の理解を優先する
- ③既存の日本語教材における頻度調査の重なり100～200をベース
100にすると、そこで支援が終わってしまう可能性があり、漢字の構成、使用法について十分な知識が得られず、自律学習に繋がらないのではないかと考える
- ④同類型（数字・曜日など）の漢字は200位圏外からの追加
- ⑤日本社会の漢字出現頻度数調査を参考に、頻度が低い漢字は除く

その他 AJALT が重要と考えること

- ・音訓を限られたものにし、おぼえるもと覚えなくても良いものを選ぶ
⇒ 特にやさしい漢字に読みが多い（多音訓字）、
- ・造語力のあるもの
- ・訓で意味がとれるものから（文法も学べる）
- ・漢字の構成（漢字の80パーセントを占める形声文字【音符】）がわかるもの
- ・漢字の形をパーツによる構成と考えると覚えやすい。

この前提には、

- ・まず、策定された漢字語を学んだ上で漢字を指導する。義の部分の負担軽減。
- ・カタカナが自らの氏名、国籍を記す際に使われる文字であり、日本語におけるカタカナ使用の全体の1割を超えていること、また、カタカナは漢字の一部であることから、字形理解のためにもカタカナの指導をしっかり行う。
形の理解に繋がる。
- ・聴いてわかるよう指導をする。運用力が高まる。
- ・文字を知っているだけでは使えない。語彙を導入することが肝心である。
- ・文字・漢字語彙と共に文脈の中で（漢字かな交じり文）読み取る力を養成する。そうしなければ文字列の中から情報を読み取る力を養成できない。

以上